

おひめさまと少年

ある国に、わがままかっつてにくらしているおひめさまがいました。

おひめさまは、朝起きる時刻も、夜ねる時刻も、その日によってちがいます。食事しょくじも、すきなものしか食べません。

ある日、おひめさまは、遠くから聞こえてくる気持きもちちのよい歌声で目をさしました。

「なんてすてきな歌声でしょう。だれが歌っているのかしら。」
家来けらいにたずねても分かりません。

「ぜひ目の前であの歌を聞いてみたいわ。」
次つぎの日も、明るい歌声で目をさしました。

「すぐに、歌っているものをさがしてきなさい。」

おひめさまに命令めいれいされた家来は、一人ひとりの少年をつれてきました。

それは、おひめさまと同じ年ごろの少年でした。



「あなたの歌声がとても気に入ったわ。ここでくらしてわたしが聞きたいときに、あなたは歌を歌うのです。」

おひめさまは、少年に命令しました。

次の日から、おひめさまが起きると、すぐに少年はよばれ、歌いました。夜も、おひめさまがねむるまで歌いました。

おひめさまは、聞きたいときに少年の歌声を聞きながら、毎日ゆかいくらししていました。ところが、少年の声が、だんだん出なくなってしまうのです。

少年は、おひめさまに話しました。

「このままだと、わたしは歌えなくなってしまうです。どうか、もとの生活にもどしてください。」

「それはゆるしません。このままわたしのところで歌い続けるのです。」

少年は、仕方なく、歌いつづけました。とうとう少年の声は、出なくなってしまうました。



おひめさまは、歌のない生活にもどってしまいました。

「仕方ありません。あなたをもとの生活にもどすことにしましょう。」

おひめさまは、少年に言いました。

数日がすぎました。また、昔のように明るく元気な歌声がひびいてきました。おひめさまは、すぐにあの少年だとわかり、おしろによんでたずねました。

「なぜもとの声にもどったのですか。」

「とくべつなことは、何もしておりません。おしろに来る前のくらしをしただけです。」

おひめさまは、なぜ少年の声がもどったのか、知りたくなり、少年の町に出かけてみました。

町の人たちは、決^きまった時刻に起きて、しっ^{いっ}かり食事をとり、一^{いっ}生^{しょう}けんめいはたらいています。夜になれば、決^きまった時刻にねむります。町には明るく元気な気持ちのよい歌声がひびき、みんなが楽しく生活しています。



おひめさまは、町の人々の生活をみて、自分のくらしぶりを考えてみました。「わたしも、少年のようにすてきな声で歌ってみたくなったわ。」次の日からは、いつもわがままで、すきなことばかりしているおひめさまはいませんでした。

数年がすぎました。おひめさまは、みんなからしたわれる女王様さまになっていました。その上、女王様も、あのときの少年と同じように、明るく元気な気持ちのよい声で歌えるようになりました。

歌は、女王様の国中くにじゅうに広がり、みんなが元気でしあわせにくらせる国になっていました。

